

令和2年8月24日

保護者の皆様

昭島市立富士見丘小学校
校長 稲垣 達也

型破りな発想が突破口

この夏に、イタリアの物理学者で作家のパオロ・ジョルダーノ氏の近著『コロナ時代の僕ら』（早川書房、令和2年4月24日）を読みました。コロナ禍の2月末から数日間で書かれたエッセイ集です。

「僕たちは今、地球規模の病気にかかっている最中であり、パンデミックが僕らの文明をレントゲンにかけているところだ。数々の真実が浮かび上がりつつあるが、そのいずれも流行の終焉とともに消えてなくなることだろう。もしも、僕らが今すぐそれを記憶に留めぬ限りは。」という一節に、大きく心を揺さぶられました。

コロナ禍は、偶発的な出来事ではなく、必然的な感染症の流行と捉えるべきです。このような感染症は、規模や形を変え、歴史上繰り返されてきました。当然、今後とも、人知を超えた形で、再び起こり得ると考えられます。

パオロ・ジョルダーノ氏が最も恐れていることは、「コロナが終息し、日常生活が戻ってくることによって、歴史的感染症の流行を人々が少しずつ忘れていくこと」であると指摘しているのです。「コロナウイルスはどこから来て、人類に何を伝えようとしているのか」と、語っています。

日本では、ネットの話題のように、にわか仕立ての「知識」や「専門家」、拡散する不確かな「情報」、歪められたデータの中から「真理」を見出そうとする愚かさが目に余ります。まさに、想像力の欠如です。コロナ禍を、ワイドショーのレベルで捉えている限り、人類に未来はありません。

今を生きる私たちは、コロナ以前とは異なる世界に向けての歩みを進めていかねばなりません。確固した正解のない問いに直面する日々、今までの当たり前や常識が通用しない時代を乗り越えるためには、これまでにない型破りな発想が解決の突破口になるのではないのでしょうか。

何よりも、「未来の守護者」である子供たちに、型を破るために必要な「基盤となる型」を学び、確かな学力、生きる力を身に付ける教育を充実させることが、学校の使命です。そのためには、まず、私たちがこれまでの発想に囚われることなく、柔軟で豊かな考え方をもち、子供たちの教育に当たることが不可欠です。

富士見丘小学校は、このような考えに基づき、これからも「未来の守護者」を育てる教育に全力を尽くしてまいります。

保護者のみなさまにおかれましては、2学期も、今までと変わらず、子供たちを温かく見守り、慈しんでいただければ幸いです。

どうぞよろしくお願い申し上げます。